

コードボーディング、及びコード進行ガイド

Table of Contents

前提	1
概要	2
a. コードスケール	3
b. コード進行先/転調先一覧	5
なぜこれらを作る必要があったのか	7
製作したものの制限や問題点	8

前提

このガジェットは電気を使わない。 星座早見表や計算尺のようなアナログコンピューティングにて実現する道具となる。ただし、より複雑、柔軟な表現が求められる場合は、マイコン使用に躊躇しない。

これから音楽を学ぶ人の助けになればより幸いと考える。

概要

以前、手作りにて作成した、作曲に際して補助となるいくつかの道具がある。

1. あるコードスケール、またはコードファンクションにおける、ボイスニングの一覧図
2. コード進行における次に展開可能なコードまたは調の一覧図

いずれもギター用のTAB符表記あるいはキーボードのキー表記の二種類がある。 a.は、すでにコード進行あるいは曲が出来ていて、そこに合わせた具体的な演奏フレーズを作成する際に使用する。つまり、より狭い領域で使う。これを使うことで、コード符上のとあるコードにおいて、どのような音を採り得るのか、視覚的に知ることが出来る。 b.は曲を作る際に使う。つまり、より広い領域で使う。あるコードから次への展開を考えるにあたって、次に採り得るあらゆる転調先を含むコードを ギターのTAB符の形でコードのルート音の位置を図示する。

a.コードスケール



Figure 1. Keyboard用コードスケール図。キーボードに置いて使う。Rootの位置を合わせると、他の音がキーボードのどこに配置されているか一覧できる。

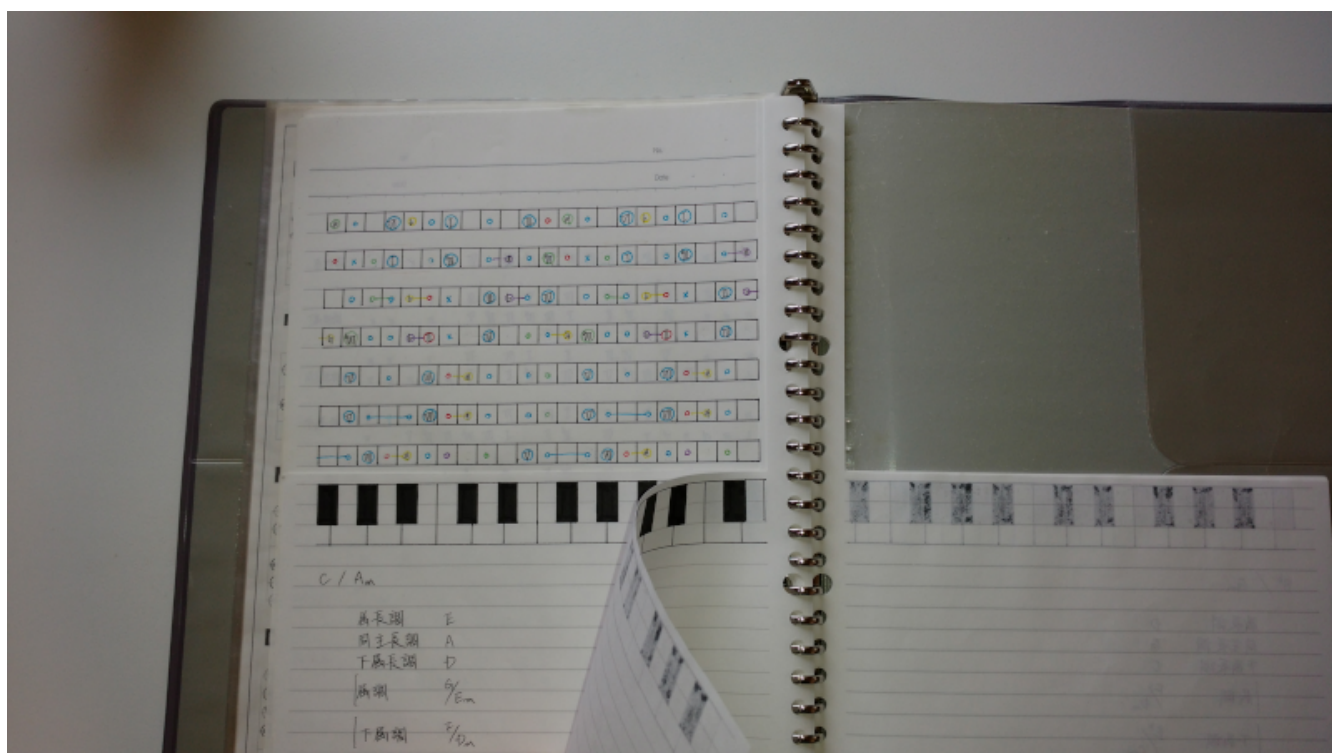


Figure 2. 同、ノート版。あまり使えなかったため、上記を追加作成。

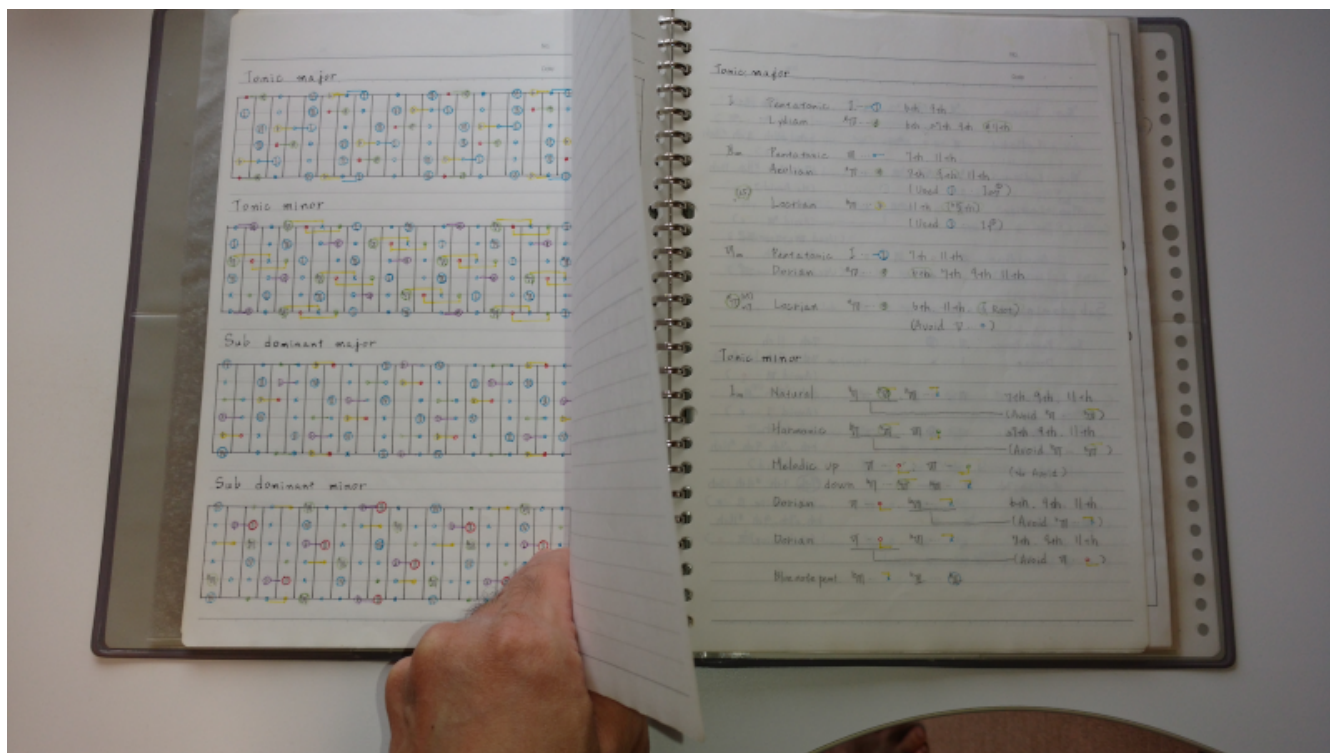


Figure 3. Guiter/Bass用コードスケール図 全21ページ

b. コード進行先/転調先一覧

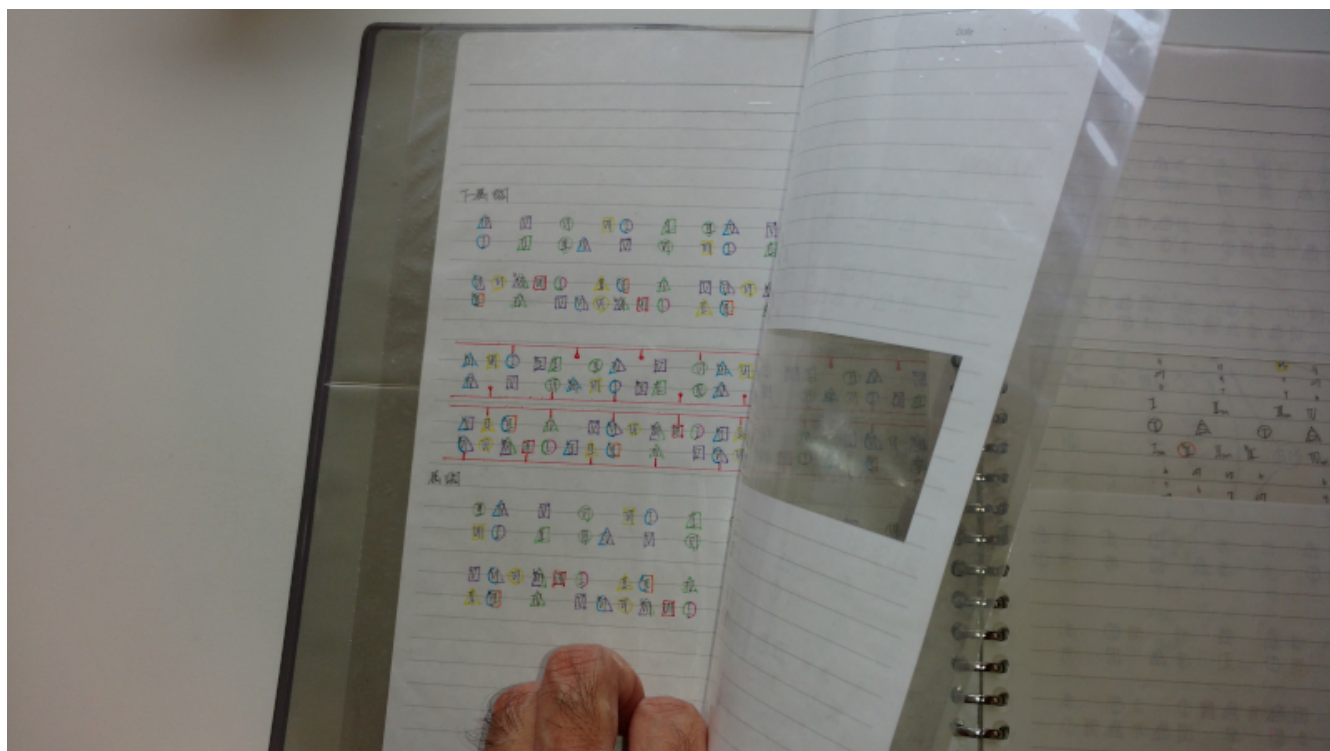
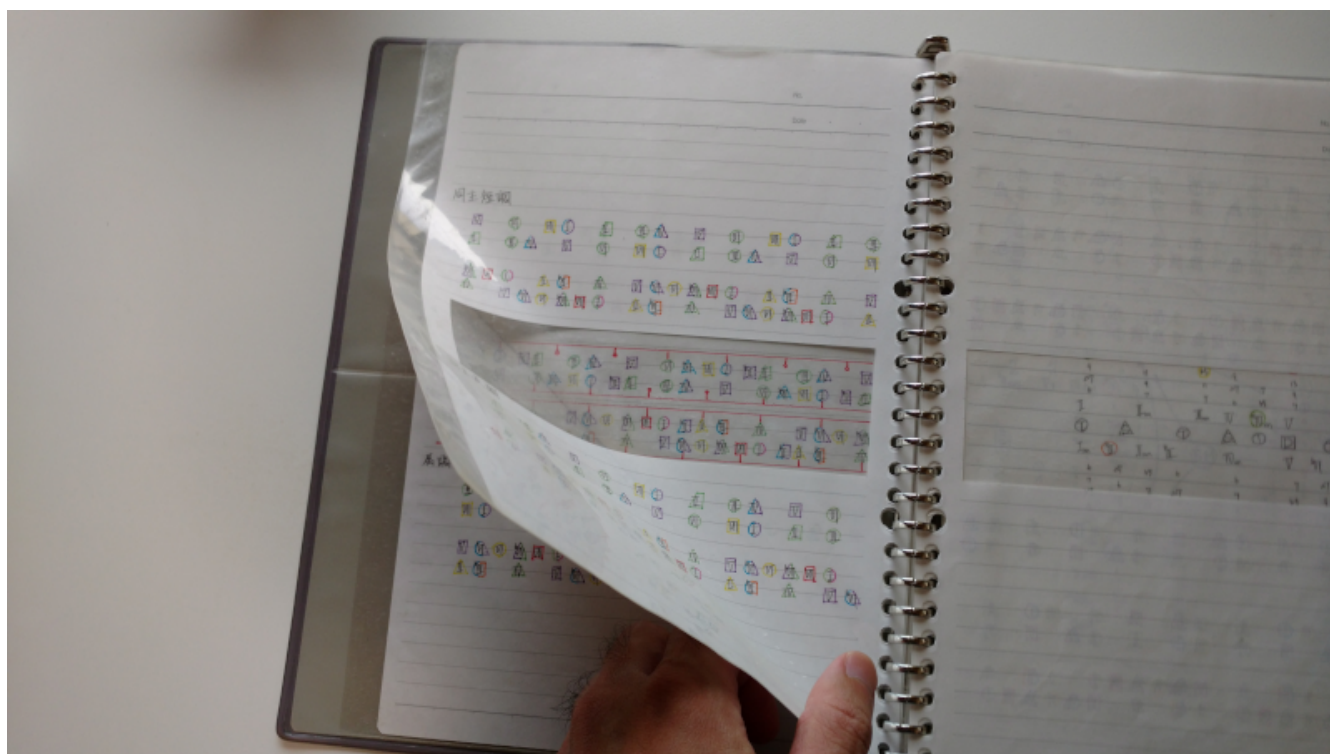


Figure 4. Guiter/Bass 用 コード進行先、転調先一覧。全3ページあり、最初の1ページ目の真ん中が現在の調(5弦6弦、Maj/Min合わせて4行)、上が下屬調、下が属調への転調の場合のコード配置。残り2ページは真ん中の窓が透明。最初のページの真ん中の現在調に対して、2ページ目は同主短調と同主長調、3ページ目が下屬短調、属短調、下屬長調、属長調



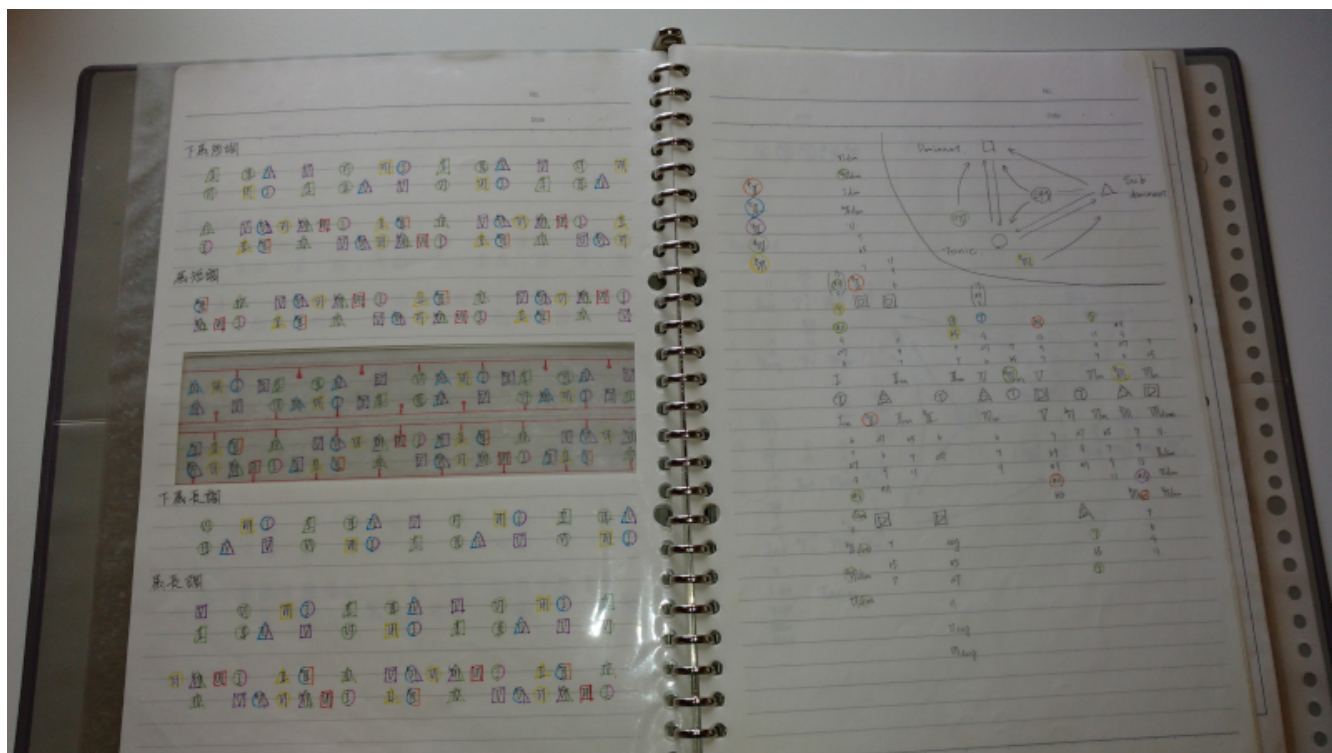


Figure 5. 3ページ目(左) 及び 進行/遷移一覧図(右)

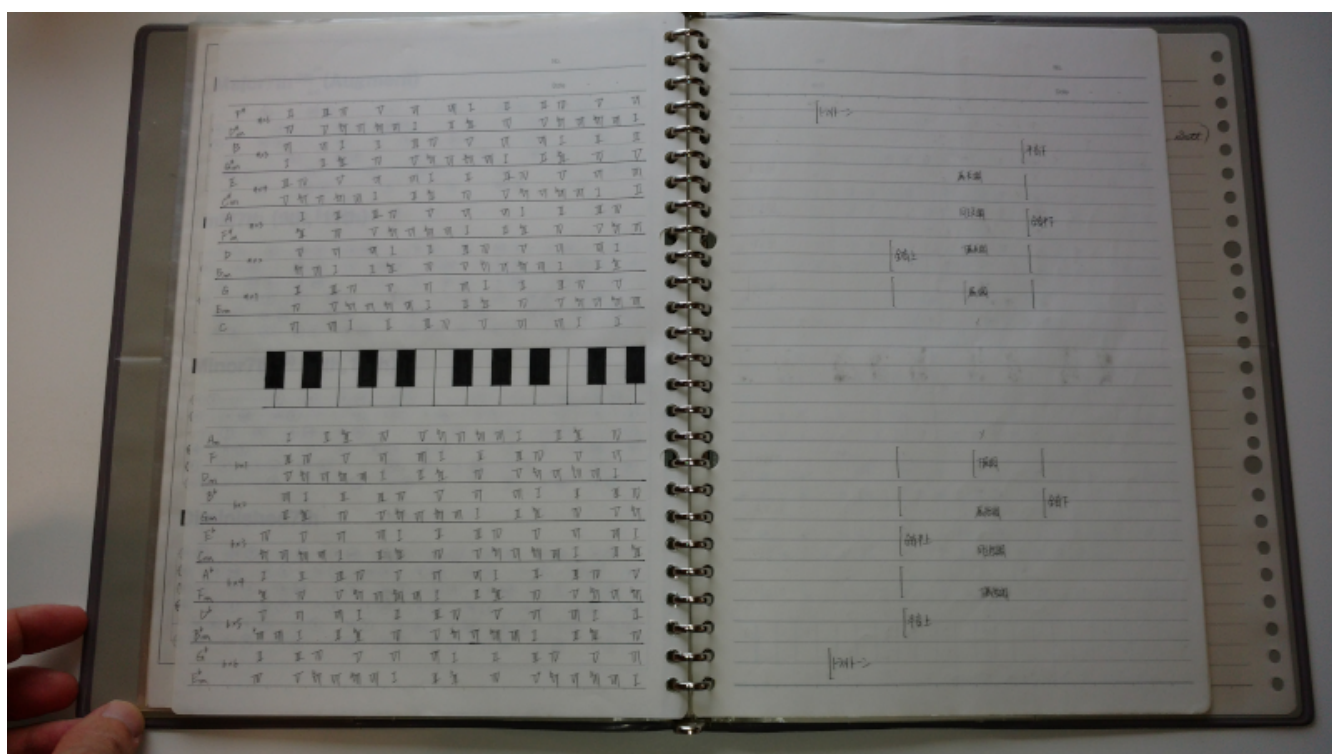


Figure 6. Keyboard用 コード進行先/転調先一覧

なぜこれらを作る必要があったのか

作曲を独学で学ぶとなると、大きな障害となるのが理論の勉強となる。教材が見つからない、と言う事。どこを見ても「誰々のプレイの真似の仕方」「定番のコードの押え方」などしか見当たらず、自分で作った曲に対して、自由にその場に適したヴォイスングを行う方法を記した本が見つからなかった。他人の作ったフレーズを意味も分からずに拾い集めてコラージュするなど絶対に御免だった。

状況を見るに、作曲をしようという人口は、よほど少ないと見える。

結局見つかったのは12平均律に限ってのすべての利用可能なコードを表記している本だけだった。

ここから具体的に楽器でこれらハーモニーを奏でるとなると、どこにそれら望む音が散らばっているのか、全く不明だった。そこでこれらを探すために、一覧表となるものを自前で作る必要があった。

この道具を作ったことで、あらゆるヴォイスングやフレーズの可能性を隅々まで検討できるようになり、少しずつ各楽器のヴォイスングやリックを作成し、蓄積し、作曲の糧とすることができた。

製作したものの制限や問題点

- ルーズリーフの紙とバインダを利用した手書きのものだったため、立体的な複雑な構造は作れないという製作上の制限が大きかった。
- コードスケールは、既存の12平均律だけであったため、12平均律以外の民族音楽や古典音律などに対応していない。
- a.よりもさらに狭い領域である「そもそも、なぜこの音程ならハーモニーが成り立つのか」という、一番根底を示す領域は作っていない
- 上記のため、より低位に位置するコード(ハーモニー)そのものを音律の区別無く全て一から製作するための道具は作っていない。
- この道具のみを渡されても、12平均律の音楽理論の知識的背景がなければ使い方が分からない。作曲の初学者を導く意味でも平易で丁寧なドキュメントは必須。